
IS -Dark-

公国軍残党@D艦隊兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - Dark -

【Nコード】

N7659T

【作者名】

公国軍残党@D艦隊兵

【あらすじ】

世界には裏がある。表で人の世が女尊男卑になろうとも、裏で犇めく魑魅魍魎は虎視眈々と表の世界を狙っている。その裏の世界で、世界を支える組織の一つが日本、陰陽寮。代々天皇家に仕える退魔の集団である。その陰陽寮が一つ、千方家にその血を色濃く継ぐも、家名を捨て、傭兵へと成り下がる男が居た。その者の名は新実。勝手気ままで自分本位。そんな男がとある戦場でIS操縦者を殺害し、コアを入手する…

* - 1 斬殺（前書き）

ゼブラーマン ゼブラシティの逆襲の新実が漢過ぎて感動して書いた。

後悔も反省もしてない。

* - 1 斬殺

ーっ
それはどこの紛争地域から流れ始めた戦場神話の

P A P A P A P N !
D R U U U U U U U U U U A A A A ! !

シピイイイン

「ぎゃあああああ！？俺の腕！？折れの腕がぐべっ」

グシヤッ。

「ひっ、や、やめろっ！俺が悪がっ？！」

ズシユッ。

DOOGOM! DOOGOM! DOOGOMU!

シピイイイン

ドカアアアアアン!!

「せ、戦車もやられたのか!？」

「じよ、冗談だろ!?! あ、相手は刀しか持ってねえぞ!？」

『こちらHQ! 状況を報告せよ!!!』

「HQ…さ、サムライだ…サムライの幽霊が居る!!!」

自ら返り血一つ浴びず悠然と佇む

『こちらロケット部隊！これより発射する！！射線に入るなよ！』

「ああ！いいから吹き飛ばしてくれ！！」

B A S Y U ! B A S Y U ! B A S Y U !

「死ね！サムライゴーストめ！！」

『 千方流 秘技・甲背斬 』

時代錯誤の東方の亡霊^{サムライゴースト}

シューウウウウ…

「…や、やったか！！」

『 千方流 死突 』

『がつ！？』

ズシユツ、ドゴオオオオオン！

「そ、そんな馬鹿な！」

「う、嘘だろ…」

「はいはい皆さんご苦労様。ご苦労ついでに

死んでくれる？」

相對すれば、死、あるのみ

戦場は喧騒がなくなつて一気に静かになり、爆発によつて生まれ
た炎があちこちに揺らめいてパチパチと音を立てるのみとなる。そ
こに生命の息吹はなく、綺麗な斬り口をした物言わぬ人間だった物
と兵器たちが廃墟となつた一帯と同化するよう景色になる。

「…」

この廃墟を作り出した張本人の男はそれを無言で確認すると、刃
こぼれどころか血一滴纏わない刀を腰の鞘へ戻し、チキツ、と僅か
に音を立てる。

風の音と、炎が僅かに弾ける音。

静寂が支配し始めた戦場だった場所に、一人の奇妙な格好をした
女 いや、兵器といふべきか が空から現れる。

「てめえがサムライゴーストか。本当に存在するとはな…男だった
のかよ」

吐き捨てるように言う女。

現れたのは、傭兵集団の基地に配備されていた 実態はI試験
を兼ねての出撃を行っていた、某軍のIS。

大方また実験的戦闘を行っていたのだろうが、自分の所属する基
地が襲撃されてとんぼ返りしたのだろうか、ひと足遅かったようだ。

「それがISか。ふーん。初めて見たけど随分と面白そうな玩具だな？」

大してそれを馬鹿にしたようにこちらを見上げ、鼻で笑う男。

刀一本に返り血一つ浴びず、汗ひとつかいてない姿からすれば、先程までこの惨劇を作り出していたとは思えない姿だ。

「ここ最近我々の邪魔をしていたの、てめえだな」

IS用のライフルを向けながら女が言う。

邪魔、というのはこの地 アフリカで行おうとしていた、ISの非合法の実験。対人戦や多対一の戦闘に関してのデータ取りの妨害行為だった。

傭兵の拠点に偽装されて展開されていた某軍の基地の数々は、謎の襲撃によって次々と壊滅しており、ここが最後の拠点となっていた。ISの普及により安上がりになった旧世代兵器の最新だったものを多数買取り、IS以外の襲撃に対しては万全、の筈だったが。

現実にご覧のとおりである。

「さあね。依頼があれば何でもするから、一々覚えてねーよ」

「ほざけ。てめえを殺して、その辺に晒してやるよ。コスプレ男が」

「鬱陶しいんだよクソアマ。黙って斬られるよ」

そう言って刀を向ける男。

切っ先が光を反射して光る。

それを見た女は鼻で笑うと、跳躍。

IS用のライフルを展開して男へと向ける。

「ハッ！男が！ISに！適う訳無いだろっ！！」

ガアアン！！

IS用のライフルを男に向けて発射する女。発射された弾丸は男へ目がけて飛ぶ。が、男はその場を動かず、弾丸が直撃する直前で刀を振るう。

すると弾丸は軌道を逸れ、男の5m横にクレーターを作った。

「弾を…！？へえ…やるじゃない」

僅かな動揺と、対する絶対的な安心感。

普通ならここでただ者ではないと確信し、十二分に警戒する所だろうが、ISに乗って高揚感と征服感に満たされていた女がそれに気づくことはなかった。

「随分と余裕だな、あんた。死ぬよ？」

「死ぬ…？アツハハハハ！傑作だぜ！そこからどうやって俺を殺すつもりだ？空も飛べねえくせによお！！」

「飛べるから強いってか？鳥頭が。頭弱すぎ」

が。

「馬鹿はてめえだよ」

「なっ!？」

ミサイルの一つが男へ直撃しようとした瞬間、抜刀。

真正面から真つ二つになったミサイルは一瞬中を漂い、男はそれをそのまま踏み台にして更に跳躍。踏み台にされたミサイルは思い出したかのように爆発し、その爆発が男を更に早く空へと押し上げた。

「」 千方流 死突・連 「」

千方流剣術が一つ、死突・連。男が放つ超高速・連続の突きは、真空刃となって空を斬り裂き、次々とミサイルを両断。

通り過ぎる頃に爆発し、男を押し上げ続ける。

「なっ、そんな馬鹿り、ぐあああ!？」

放った真空刃はしつかりとIS操縦者にも届き、シールドを通り抜けた衝撃がミサイルを放った呪詛返しが如くダメージを与え続ける。

「言つたる?死ぬよ、つてさ」

「くそ、何なんだよ!?!何なんだよお前は!?!」

「頂戴候」

一瞬の間。

刀身はゆっくりと鞘へと戻り、チキツ、と音を立てしつかりと男の腰元へ戻った。

刹那。

ISの絶対防御とシールドを上回る技量で繰り出された必殺の抜刀は確実に捉えており、女の首は滑るように流れ落ちた。

「ISねえ…奈良で斬った鬼の方がもつと固かったし手強かったよ」

あれほどの高度から何事もなかったかのように着地した男は刀を鞘へと戻す。

ふと、後ろを見ると首を無くした女の体が転がっており、辺りに赤を広げていた。ISの装甲が展開されていたせいか、その体は首から上以外無傷であったが、死を持って搭乗者の存在を否認したISがその形態を解き、消える。

「…ん？」

ふと見ると、女の首　があつた場所の血溜まりにネックレスが出現していた。首なら切り落としたから見たが、ネックレスなどなかつたはずだ。

「…ISか。使えたら便利そうだけど、男には無理だっけ。…いくらで売れるんだ？」

何気なくそのネックレスを拾う男。

しかし、手にとつた瞬間異変が起こつた。

「…！？……こいつ、動くな」

手にとつた瞬間光るネックレス。

その光は徐々に変化して…二振りの鈴へと変わった。

驚いたのか、男はゆっくりと瞬きをしたもう一度鈴を見る。揺らすと、鈴はシャリーンと、涼し気な音を奏でた。

それまで淡々としていた男の表情が、ゆっくりと変わった。

「ふーん…何だ。ISって面白そうじゃん」

襲撃を受けた某国：正確には某社は、その威信にかけて襲撃した犯人を追ったが結局見つからず、また非合法の実験を行っていた最中に襲撃を受けたなど公表できるはずもないのでそれは必然的に機密になり…

世界初の人対ISの事実とISを使えるようになった男の事は誰にも知られることもなく、ひっそりと埋もれていった。

* - 1 斬殺（後書き）

世界は広い。って感じで解釈してください。
いきなりぶっ殺したのはやり過ぎかと思っ
たり無かったりします
が。

主人公設定（前書き）

やっちまった感がありますけどね…

主人公設定

名前：新実^{にいみ}

身長：175cm

体重：63kg

性別：男

年齢：18

趣味：修行・瞑想・刀の手入れ

好きな物：刀・戦い・金

嫌いな物：綺麗事・面倒事

好きな食べ物：米・味噌汁

嫌いな食べ物：パン（ただしお菓子としてならよし）

容姿：黒髪黒目、顔は整っているが少し怖い

ステータス
性能一覧

戦闘面

近接SS 千方流剣術免許皆伝

射撃B 拳銃の扱い・上 精密射撃（拳銃）

特殊A 千方流陰陽術・中位を習得

身体能力EX 陰陽寮・千方家にて16年間修行

精神面

勇気S 神をも恐れぬ

根気B 修行の為なら

寛容さ - 鬼

伝達力C 口が悪い

智識A

頭脳と戦闘力はイコール

武器

大業物「大通連」 かつて鬼女が使ったとされる霊刀。

紹介

IS学園に入学する事となった元傭兵。

元々は日本の裏を守る陰陽寮の一つ、千方家の剣士として育てられ、幼い頃から妖怪や鬼を狩る術を教えられ続けていたが、陰陽寮の言う「平和」や「正義」等の教えが自分に合わないと感じていた新実は16の時に寮を抜け、傭兵となる。

(その際に千方の性を捨て、名前の新実のみを名乗るようになった)

ある依頼の際にISと戦闘になるが、その際に操縦者を斬り殺してコアを入手。適正はないがそのISだけは使えるらしい。

その後はISを見た目ではISだと分からないように偽装して度々使用し、傭兵稼業を行っていたが、ある依頼で千冬に遭遇。成り行きで、IS学園に入るように言われる。

最初は断った新実だったが世界を敵に回すほど愚かではなく、またISに関する技術を得られる事に興味を持った為、その技術を得るためにIS学園へと入った。

性格は凶悪で純粹。元々戦いや人殺しなど、黒い事が好きで傭兵

などという仕事に足を突っ込んだような奴であるので「正義」などの綺麗事が大の嫌い。

好き嫌いも激しく、気に入らない人間にはとことん厳しいし、態度もかなり悪い。だが好いたものにはとことん尽くす。…どこぞの天災に似ているのかも知れない。半端が大嫌い。

浮世離れた世界で育ってきた身のため、ISや女尊男卑といった風潮には疎いが、女というだけで威張り散らすような人間は鼻で笑って蔑んでいる。

モデルはゼブラーマンの新実。

IS設定

専用IS 鈴鹿御前

世代 不明（元の機体は第3世代だった為そう表示される）

製作者 無し。自己変化。

待機状態 二振りの鈴

起動状態 黒のタクティカルスーツに背部に4つの陰陽玉が浮

かぶ

武装 9mm機関拳銃・大通連（所持）

単一仕様能力 不明

武装も装甲も無く、ISとして最低限しか機能していない、飛べる事とシールド・絶対防御機能以外は文字通り服ほどの価値しか無

い機体。その代わりか、自己再生機能と待機時のエネルギー生成機能がある為、ほぼ無整備で稼働することが出来る。

元々は別の機体であったのだが、一度損傷して新実が入手した際に形態が変化。今のようなISになった。前述でも述べた通り、ISとしては最低限の機能しかないため武装も後付け：というより所持している9mm機関拳銃しか無いが、搭乗者の身体機能をトレースして機体に反映させることが出来、搭乗者の腕次第では化ける機体となっている。

尚、この機体は既に篠ノ之博士の手元を完全に離れており、完全に独立したコアとなっている。

主人公設定（後書き）

って感じDEATH。

ゼブラーマン見た人はどんな奴か分かるかもしれませんが…

新実カッコイイよ新実

* - 2 中東依頼（前書き）

突然ですが、中東に居ます。

* - 2 中東依頼

「今日も人斬り明日も人斬り」

物騒な歌をだらだら歌う男。

* 2 中東依頼

三日前、中東某所。

これまで選り好みせず何でも仕事をやってきた新実だが、ISを入手した時から、そのISを使えることは隠し通して仕事をしてきた。

（ISは相当ヤバイ時や全滅させられる余裕があるとき以外は使わなかった）

ある一件で殺害したIS操縦者から入手したISは、何故か新実には起動できるようになり、それと同時に新実以外には起動できなくなっていた。

一般人にはアクセサリに擬態したISには気づくべくもないし、こいつは何故か俺以外には反応しなくなっていたので、今は鈴に擬態した待機状態の時も鞘に括りつけて所持している。

こいつは最高に面白い玩具だ。戦闘機以上の機動性と戦車以上の装甲を誇る機動兵器、IS。新実に機体は、自分の培ってきた剣の技でISと同じフィールドで戦うことが出来る程度のポテンシャルが発揮されている程度だが、その道を完全に物にしつつある新実には十分すぎる機能だった。

「さて、今回は標的は一人だし、こいつも使えるかな？」

鞘に括りつけた鈴を撫で、シャラン、と鈴の美しい音色が辺りに響く。

今回新実が受けた依頼は実にシンプルで簡単。

女一人を殺すこと。

織斑千冬、とか言う女を殺すだけの、新実にしてみれば至極普遍的で、簡単な依頼、しかも報酬が尋常じゃないほどの物だった。たったこれだけの依頼の完遂で、ドル箱が山のように手に入る。

久々に気前のいい依頼で、その女と接触したら速攻でISを展開

して斬り殺して傭兵仲間と一杯やろうかと考えていた。

「さあて、仕事だな」

新実は標的の現れる予定のポイントを目指す。

たどり着いたポイント、そこは紛争の影響で廃墟となった村の一角だった。依頼では、誰かと会うために標的がここへ現れるらしい。

相手に気付かれぬよう、気配と感情を消して廃墟の一部に隠れていると、一人の女が姿を表した。

織斑千冬だ。写真で見ても思ったが、相当な美人だ。

新実とて、依頼を受ければ誰でも殺す、というほど無感情で依頼に当たっている訳ではない。だが、見知らぬ女に美人とはいえ躊躇する事はない。

女に溺れると身を滅ぼす。その程度は当然知っている。

織斑千冬が接近し、鞘に入った刀に手をかける。

既にそこは新実の射程距離。

無音かつ最速で接近し、敵にこちらの存在を悟らせる事無く標的を殺害することが出来るだろう。

(……そろそろか)

刀の柄をしつかりと握り、接近しようとしたその時、新実の刀、大通連に括りつけられた鈴　ISが擬体した普段は鳴らないはずのそれが　シャリーン、と涼し気な音色を奏でた。

「！」

「チッ」

その音に気がついた千冬が即座にこちらへ振り向く。思わぬ失態に舌打ちする新実だったが、プランを変えて真正面から殺そうと再び踊り出るが、千冬の一言でまた、一瞬硬直する。

「それは、IS…?」

「ッ、死ね」

質問に対して回答は簡潔に一言。

鈴に擬体しているISを人目で見抜いた女に、こいつは速攻で殺らないと面倒だと直感した新実。

もはや隠す必要はないと一瞬でISを展開し、刀を抜いて斬り殺そうと思ったのだが、女の手から突然現出した巨大な刀によってそれは阻まれた。

「へえ…あんたも刀使っんだ」

「貴様もISを…!?!」

「御託はいいからさっさと死ねよ!」

合わせていた刀身を斬り上げて一旦離脱。その勢いで相手の刀が一瞬上に振れあがった一瞬の隙に、驚異的な瞬発と流れで飛び込む。

それを女　千冬は展開されたISの右手で受け止めると、左手に残した刀を振り込むが、新実はそれを再び斬り上げて離脱する。

「生身でも強そうだな。どうやら殺すのは惜しそうだ」

久々に出会った刀を使う強敵。これほどの腕の相手と戦うのは随分ど久しぶりだった新実はそう言いながらも刀を構えている。

その顔に現れるは、絶対的な自信と高揚感。

「その武器、その機体…お前は一体…」

対する千冬は内心、驚愕していた。自分の弟以外に男の操縦者が居たという事実もさることながら、この濃密な殺気とわずか数本打ち合っただけでも分かる実力。

新実の乗るISには固有武装も装甲も存在していない。あるのは自前の武器であるう刀を使つての攻撃で、それはかなりの威力があった。機動以外をISに頼らないその力は恐らく、彼自身の実力。

このような男が…いや、人間が、まだこの世界に存在していることに驚き、そしてそれほどの実力を持った男が傭兵など言う仕事をしていることに更に、千冬は驚愕していた。

「…まあ依頼は依頼だ。死んでもらう」

「ッ！」

己の武器である刀、大通連を両手で握りなおし、正眼に構える新実。

殺気が更に濃密になり、それと同時に隙がなくなる。

お互いに警戒し、一步も動かなくなる二人。少しでも動きがあるうものなら即座に斬り合いかねない緊張した空気。

「…」

「…」

チキッ、と千冬の持つ刀から僅かな金属音が発せられ、それと同時に二人が突発的に動き出す。

「『千方流』」

「はあああああ！」

「連斬・二連！」

移動しながら繰り出された斬撃が衝撃波となって千冬を襲う。その攻撃を一発目は相殺したが、襲い来る第二波を全て殺しきれず、

シールドエネルギーが減少する。

対する千冬はそれを受け流した後に驚異的なスピードで接近し、そのまま流れるような太刀筋で刀を振り下ろしてくる。

それを新実は最低限の動きで交わすと、腕を蹴りつけてその反動で距離を取る。が、そこへ突入したスピードを殺さずに更に増し、接近してきた千冬が再度刀を振るう。

「獲った！」

「隙あり」

刀をふりあげて無防備になった腹部へ向かって、右手で握られた9mm機関拳銃が弾丸を吐き出す。元々は対人用の武器で、ISからすれば9mmなどどうということはない。通常の状態なら。

しかし、新実に向かってかなりの速度で接近している為、直線状、真正面から放たれた弾丸は相対的に衝突時の速さと威力は増すことになる。

「っ！！歩兵用の機関銃！？」

「ただの傭兵なんでね。IS用の上等な武器は持ってない」

25発のフルオート射撃を受けた千冬は斬りかかろうとしていた機動を一旦キャンセルし、再度突撃をかますが、その一瞬で弾の切れた機関拳銃を捨て、体制を整えた新実の刀がそれを受け止める。

「何故貴様ほどの手練が傭兵など！」

「さあな」

何度もぶつかって斬り合う二人。新実の汗ひとつかかず刀を振るい続け、千冬もブリュンヒルデに恥じない立ち回りをしてる。

「チツ、流石に前のようにには行かないか」

「（剣の腕は相手が上だが、向こうはISに乗り慣れていない…？）」

ところどころの機動の立ち回りに僅かな違和感を感じる千冬。その違和感は熟練した戦士にしか感じることが出来ない些細な物だったが、十二分な実欲を持つ千冬はそれを理解した。

「はあああああああ！！」

イゲンミッションブースト
瞬間加速。文字通り瞬間的な加速によって繰り出された一撃。流石に予想だにできなかった攻撃に若干反応が遅れる。

ガキイイイン！

「くつ、ISか！」

「はあああああああ！！」

若干反応が遅れた分通った刀身が、新実のタクティカルを皮一枚切り裂く。

（なるほど、縮地のようなものか…面白い、本当に面白いな、IS

(織斑千冬)！)

「たあああああ!!」

「その速さが命取りだ!」

再び瞬間加速イケニッションブーストを使って、本格的に高機動戦に持ち込もうとする千冬。

「(これで決める!)」

物凄い加速で新実へと接近していた千冬。が、その姿が突然ぶれたかと思うと、ハイパーセンサーの反応から消えた。

「なっ　うぐっ?!」

「…縮地」

シャリーン

反応をロストした新実は　千冬の懐に入っていた。あまりの急接近に自身の反応と密着して気づかなかったのだ。

縮地を行い、一瞬で千冬の懐に入り込んだ新実は、その加速力をそのままに鳩尾へ納刀した刀の柄で寸打を放っていた。

新実の縮地と千冬の瞬間加速によって生まれた運動エネルギーによって放たれた、物体の表層を浸透して内部へとダメージを与える寸打の威力は絶大。物体の表層を通り抜けて内部にダメージを与えるそれを、人間の急所である鳩尾に放ったのだからその威力はとて

つもないものとなる。

少なくとも、千冬を悶絶させて動きを止めるには十分、そして新実が刀で首を切り落とすのに必要な時間にして十分だった。

「御首」

「ッ…グッ…！」

急いで離脱しようとするが、間に合わない。寸打を放った時点で、新実の手には既に刀が握られている。後は抜くだけだ。

刀の刃が陽光に反射して光り、今正に千冬の首を交差しようというその時。

『ミサイル反応 数14』

「グ…っ、な、何？」

飛翔してきた数10発のミサイルが邪魔をした。

「チッ」

それに気づいた二人は互いに離れ、飛翔してくるミサイルを切り伏せ、断裁されたミサイルは一瞬の間とともに大爆発を起こした。

爆風が二人の体を撫でる。

「ハアハア…これも…貴様の仕業か」

「今正に止めを刺そうというときに、こんな無粋なことをすると思
うか？」

「…そうだな」

千冬はハイパーセンサーで、新実は純粋な視力と驚異的な直感で
感じ取った新たなミサイルに、状況を理解する。

「どうやらクライアントが裏切ったようだな。…はあ、報酬も出ね
えし、お仕事は終了だな…残念だ」

先程までの殺気は霧散し、やってられないといった感じで頭を搔
く新実。

「終了と言う前に、この状況を何とかしないといけないと思うが？」

「これ位何でもない。お前こそせいぜい死なないようにするんだな」

お前を殺す理由はなくなったが、かといって味方するわけじゃな
い。と新実。

こちらへ向かって飛来するミサイルの第二群に、二人は対峙する
のをやめ、ミサイルの向かってくる方角へ向かう。

「…背中は何に任せられるのか？」

「何寝ぼけたことを言ってやがる。自分の背中は自分で守れ」

鼻で笑う。

新実は今度こそ、刀を抜いた。

「で、戦闘も終わったところでお前に一つ頼みがあるんだが」

「なんだ？」

全てのミサイルを撃墜し、地上に降りた新実が千冬の方を向いていった。右手に握られる大通連は刃こぼれ一つせず煌めいておりその鋭さを示している。

「何、簡単だ。死んでくれ」

刹那、閃光。

「…何の真似だ？」

とっさに受け止めた千冬だが、その威力の反動で若干体が後退している。片手で刀を振るった新実は一度横へ刀身を払い、両手で握り直す。

「お前のクライアントは裏切った。私を殺す理由はないはずだ」

「悪いが今の仕事が入ってるんだ。俺がISに乗っていることがバレたら面倒なことになる。だが…」

「私を殺せば、それを知る者は居なくなる、か？」

「ご名答」

再び閃光。

先程の剣速をはるかに上回るそれを受け止める千冬だが、装甲の一部が両断され、地面へと落ちる。

「そうか。このままでは殺されてしまいそうだな」

「聞こえなかったのか？俺は殺すって言ったんだ」

正眼に構え、ぶれない新実。

その目には静かなる殺意が感じられる。

対する千冬は攻撃を受け止めるだけで、動かない。

「まあ慌てるな。私を殺しても意味はない」

「…理由を言ってみろ」

「既に私のISから情報が流れているだろう。これは自身の行った戦闘データを集めるからな」

「…ISごと破壊すれば済む話だ」

刀を向ける新実の目が、一瞬揺れ、わずかながらに動揺が走る。

「いや、データは既に私の身元の組織に贈られている。貴様の存在は白日の物となったな。今さら私を殺しても遅い」

「……………」

「さあ、どうする」

「……………チツ。命拾いしたな」

なにか納得がいかない表情をした新実だったが、本当に殺す理由がなくなったのか、刀を下ろした。

「ハア…クソが…」

「貴様が受けた依頼だろう。自業自得だ」

「…さっさとどこへでも行け」

もはや興味を無くした新実は刀を鞘に収め、背を向けて立ち去ろうとするが、それを千冬が引き止める。

「まあ待て、そう慌てるな」

「…今度はなんだ？」

新実が凄く嫌そうに振り返る。振り向いた先には、何故か不敵な笑みを浮かべている織斑千冬がいた。

「このままだと世界中から追われるわけだ。それは貴様とて嫌だろ
う」

「誰のせいだと思っている」

「この疫病神め、と新実。が、千冬はそれを意にも解さず続ける。

「そこでだ。IS学園に」

「断る。誰かそんな所へ行くか。ガキの遠足じゃないんだよ」

「だがそれ以外選択肢はないと思うぞ？」

ぐ、と言葉に詰まる新実。

…確かに新実とて戦いや戦争は好きだが、かと言って世界を敵に回そうなどと思うほどイカれてはいない。

「さあどうする？」

……………非常に癪だが、呑むしか無いようだ。

「この疫病神め」

「ふふっ、これからよろしく頼むぞ」

実に忌々しそうに呟く新実と対照的に、何故か少し嬉しそうに晒

う千冬。それを新実はバツが悪そうに見る。

「よくもまあ、テメエを殺そうとした奴を招けるもんだな…」

「もう殺す気はないのだろうか?」

「今は殺してやりてえよ」

そう言つて千冬を恨みがましく睨む新実だが、先程までの凄みはない。ある程度歳相応の新実の顔に、千冬はくつくつと笑う。

「よし、じゃあ早速…おっ、と」

「チツ…おい」

何かを話そうとして急に倒れこみそうになる千冬を、何とか受け止める。そのまま起こそうとするが、足に力を入れる様子がない。

「…何してんだ」

「す、すまない。どうやらさっきのダメージが響いているみたいだ…」

おそらく鳩尾のダメージがじわじわと効いてきたのだろう。相当な運動エネルギーを持って発せられた寸打であったから、普通の人間なら気絶していてもおかしくない。下手したら内臓破裂だ。

「さっきから限界でな、少し休めば…」

どうやらもう足に力が入れられないらしい。

「厄介ごとばかり…本当に手間がかかる女だな…」

「む、むう…貴様がやったのではないか…」

「…ハア。ほら、乗れ」

自分でやったこととは言え、女が傷ついて動けなくなっているのだ。フェミニストではないが、放っておくほど鬼ではない。

「いや、だ、だが…／／／」

「いいから乗れ。話が進まないだろうが。ったく…」

立っていられなくなった千冬を無理やりおんぶする。

「す、すまない／／／」

「いいよいいよ。もう毒を食らわば皿まで、だ」

何故か達観した表情で頷いている新実。もうどうにでもしてくれ、って感じた。

「私はそういう扱いか…」

背中にのしかかってくる体重に乗じて背中に感じられる柔らかかなナニかの圧力がかかるが、いちいちそれに反応するほどガキでもない。

千冬を背中に載せた新実はそのまま空へ旅立だつ。

行き先は、IS学園。

「こんな依頼受けなければな…少しおかしいとは思ってたんだよ」

「どついう事だ？」

背中に乗った織斑千冬が耳元で問いかける。少しは位置を考えろ、息がかかる。

「変な文面だったし、報酬も破格だった」

最初は大当たりを引いたと思ったが、蓋を開けてみればとんだ貧乏くじだ、と新実。それを聞いて何か思案した顔になる千冬。

「…お前に依頼を持ってきた手紙だが、ウサギの耳がどこかに書かれてなかったか？」

「…何故知ってる」

確かに書かれていた。

それを知っているということは…そういう事か。

「私の知人だ。私もそいつに言われてここ来たんだが」

「…なるほど、茶番って事か。…ド畜生が」

一銭も入らず、3年間も豚箱同然のところにぶち込まれるというわけか。

…ツイてないが仕方がない。

3年のうちに、雲隠れする方法を考えるとするか。

* - 2 中東依頼（後書き）

だらだら書いてます。

何かあったら言ってください。

* - 3 IS学園(前書き)

色々言いたいことは出てくるだろうし、何でそんなに偉そうなんだよって思う所もあるだろうけど悪い人って無駄に言うこと聞きたがらないよね？

制服云々は自分でも馬鹿だと思う。
でも新実に白は似合わない。

* - 3 I S 学園

「女ばかりか…鬱陶しいな」

I S 学園の敷地内に学園では珍しく、男子用の制服を着て、腰に刀を下げた一人の男が立っていた。

* 2 I S 学園

I S 学園。

それはI Sの操縦者を育成する日本の女子学園である。

世界中のI S代表を目指す女子が集まる学校で、日本国にありながら治外法権のような扱いをうけている場所でもある。よって学園の内部は一部を除いて女性しかない。

ISという機動兵器が元々女性のみしか受け付けないフェミニストのような機械だから仕方が無いのだが、教師も生徒も用務員もみんな女なのだ。

まさに女の花園だ。無論、男が来るような場所でない。

この現代、女尊男卑の風潮では、立ち入っただけで不審者、変態扱いで速攻国家権力のお世話になり、暗い困われた空間で臭い飯を食う事になるだろう。

そんなアレな学校に、男が一人。

「…何故だ」

どんな時でも、……の剣士は冷静であれ。そう師範に教わった経験から、常在戦場、冷静沈着を心がけてきた新実でも、そんな疑問で頭を抱えざるを得なかった。

何故、俺がここにいる。

「あのアマ…何もこんな直ぐに…こっちのも色々準備というものが…クソッ…」

悪態をついて頭をかかえる。

あの中東の件から、わずか1日だ。

昨日、一昨日までは暗くて汚い宿屋で壁に背を向けて寝て、起きては戦場を歩く素敵な毎日だった。それがわずか1日の出来事ここ

んな小綺麗なブタ箱に3年もぶち込まれる事となった。

千冬を送って中東からISで直行して来た新実は世話になった恩師や戦友に何も告げていない。

というのにもう、編入されることとなっちまったんだよこれが。

「日本には帰りたくなかったんだがな……」

悪態を突きながらも歩を進める。

誰にも等しく、時間は有限だからな。

「遅かったな、新実」

「急すぎんだよ、阿呆が」

廊下に居たのは織斑千冬。俺がこんな場所にぶち込まれた元凶、俺に取つての疫病神だ。見た目は美人だが。

何が面白いのか、口元に微妙に笑みを浮かべてこちらを見ている。

「日本政府にもう一人ISが動かせる男が居ると伝えたら直ぐに学園へ入れるようにとの要請があつてな。まあ何事も早いほうがいいだろう」

「こつちの事情は無視か？おい…」

「何、お前のクラスにはもう一人のISを動かせる男…私の弟がいる。幾分かは窮屈が減るだろう」

新実の主張を無視して喋る千冬にピキッ、と青筋を作りかける新実だが、弟という言葉に引っかかって留まる。

弟、というのは織斑一夏だろう。最近大々的にニュースをやつていたのを見たので、名前を覚えていた。

「弟ねえ…」

弟の話を出しただけで若干頬が緩んでいる。見た目では分からない程度の変化だが、大方その弟とやらが気に入っているのだろう。

「その歳でブラコンか？」

物事をなんの躊躇もなくストレートに言う新実。

「ッ?!…新実」

「凶星かよ…情けねえ」

パシッ。

速攻で振るわれようとしていた出席簿を左手で受けとめる。

まさか受け止められるとは思っていなかった千冬は、む、と若干顔をしかめた。

「織斑千冬。別に俺に向かって指導をしようとするのは教師のお前の勝手だが、それを全てはい分かりましたと聞くほど俺は従順じゃないからな？」

いざと成れば抜け出す気満々、首輪をつけられるのが嫌いな新実は教師たる千冬の目の前で堂々と宣言する。

まるで不良もいいところだ。

「…あああ、あの、おお、織斑先生…そ、その人が転入生の…？」
織斑千冬、もとい織斑姉とばかり話していて目立たなかったが、この場に人類はもう一人いた。

印象は地味なメガネ、でかい胸、童顔。（新実主観の印象）。ここにいるのを察するに、教師か学校関係者だろう。

「そつだ。こいつが新実だ」

「あの、苗字の方は…」

「無い」

即答する新実。

別に怒っていたり、某ひぐらしがなく村のごとく部外者に何か隠

しているわけではないが、あまり触れてほしくない話題であったため少し態度が悪くなる。

「そ、そうですか……」ガクガクブルブル

…何というか、気の弱そうな先生だ。

「そう言えばお前、制服はどうした」

「制服……？」

ああ、そう言えば学園から支給された制服があったなと思います。ちなみに新実が今着ている服は、黒い長ズボンに学ランだ。

「ああ。俺、白嫌いなんだよね」

「……………新実」

身も蓋もない自分勝手な主張に怒りで顔が赤くなる千冬と、相対して顔が真っ青になる巨乳メガネ（仮）。

千冬がそれに対し何か言わんやとする前に新実が続ける。

「郷に入っては郷に従えって知ってるよな？俺それすつごく分かるんだよね。学校に入っては学校の規則に従え。逆に言えばルールに従いたくなかったら学校に来なければいいんだよね」

要するに、これが認められないんだつたら別に自分は来なくてもいい。という主張だ。こう言っっては、かなり自分勝手に小さい主張だが、新実はそれを割とマジで言っていた。

「……………はあ。勝手にしろ」

無理やり連れてきた手前、その主張にわずかながら思うところがあつた千冬はあつさりと引き下がる。

「ああああの、織斑先生！いいんですか!？」

「…こいつはこついう奴だ。諦めてくれ」

「えええええええ!?!」

驚愕して大声を出す地味メガネ（仮）。確かに普段の千冬を知る人間からすれば何か弱みを握られているのかと思うほどの豹変ぶりだ。まああまり解釈としては間違っていないのだが。

「そう言えば織斑千冬。こいつは何だ？」

「…、こいつ…」

自分に対する新実の一言にテンションがグンっと下がる地味メガネ（女）。

「こいつとか言つな。彼女も教師だ。名前は…」

「え、えっと、新実君のクラスの副担任の山田真耶です…なんだか早速上手くやっていける自信ないですけど…」

まだ朝も半ばだというのに既に疲労の色が見られる山田教諭。

「…まあ何だ。頑張れ」

「ううー…何かおまえが言っなくなって感じですよ…」

新実の励ましに山田は涙目でつぶやいた。

「急だが、転校生を紹介する」

朝のホームルーム。自己紹介の後に千冬姉えが教室に入ってきて色々あった後（主に俺が出席簿で殴られる）直ぐに、そんな事を言った。

転校生、と言っても、ついさっき自己紹介があったばかりだ。学校だって今日からだし、急すぎるというが時期がおかしいだろ。

だが、針のむしろにされていた一夏からしてみれば後一人女子が増えようとあんまり関係の無いことだと、これから入ってくる人物にそう何か思うところはなかった。

が、入ってきた人物を見て、一夏の心象は180度変わった。

「入れ」

「…」

ガラッと教室の扉が開く。

入ってきたのは、黒髪でIS学園の制服を着ずどこかの男子校が着そうな一昔前の学ランを着崩したスタイルで、腰に刀（何故に？）をさし、至極面倒くさそうに入ってきた…

「お…男？」

沈黙が支配する教室で、女子生徒の誰かがいった。そう、入ってきたのは男だった。

「いよっしやああああああ！！」

一瞬呆然としていた一夏だったが、一泊置いて思わずガッツポーズ。

これで何とか一年間やっていけそうだぜ！！

パァン！！

「…痛え」

「ホームルーム中だ、馬鹿者」

うう、愛が痛い…

「…」

…それにしても、何も喋らないなこいつ。いや、俺の時も自己紹介のときろくなこと言えなかったけど…。

目をつぶって眉間を抑えてるし…何か凄く嫌そうだな。まあこんな状況に放り込まれたら嫌だよな。凄く分かる。

「ほら、新実。自己紹介をしろ」

新実と呼ばれた男は千冬姉えに促されると、ため息を付いてやっと自己紹介を始めた。

「…新実だ。苗字はない。昨日横の疫病神のせい中東から連れてこられた。以上だ」

…

…

…

…え？そんだけ？

なんか俺の時より自己紹介酷くないか？

「き…」

「…？」

き？キテレツ大百科？

「キヤアアアアアアアアアア！！」

「男！しかもクール系！！」

「俺に近寄るなって感じ！？抜身の刀みたいな性格！？」

「あの蔑んだような目…タマラナイわ！」

「踏んでください、お兄様ああ！！」

ぎゃあああああ、うるせええええええ！！

「…かつ、帰っていいか織斑千冬？」

こめかみをびくびくさせるのを片手で抑えている新実は、マジでぶち切れる数秒前、といった感じの顔だ。

「…気持ちは分かるがまだ帰るな。1日目だ。それと…」

パシイッ！

「学校では織斑先生だ」

「…分かったよ織斑千冬先生」

な、何者なんだ…千冬姉えのあの一撃を片手で見もせずを受け止めるなんて…！」

バシインン！！

「織斑先生だ」

「…い、いえす、まむ……………織斑先生」

み、見えなかったぜ…どうやってあれを受け止めたんだ一体？
頭を抑えてうずくまりながら残った脳細胞でそう疑問符を浮かべる一夏。

「静かにしる貴様ら！聞きたいことは山ほどあるだろうが、今はホームルーム中だ！聞きたい事があれば後で本人に直接聞け」

はい！と大合唱する生徒たち。

まああの新実に聞ければの話だがな…と小声で千冬姉えが言っていたのを俺は聞き逃さなかった。

どんな奴なんだ？一体…

「新実は…そうだな。一夏の後ろの席に座れ。他の女子は席を詰める」

千冬の一声に一斉に動き出す女子たち。

千冬が言うことなら軍隊バリにてきばきと動くことが出来るよう

だな。ここの生徒たちは。

「え、えっと…新実、だったよな？俺は織斑一夏。同じ男同士だし、一年間よろしくな」

「…織斑千冬の弟か」

瞬きをして数泊俺を見る新実。

「悪いがあまり慣れ合つつもりはねえんだよ。仲良くするんなら他を当たってくれ」

「い？」

予想外の返事に思わず変な声を上げる一夏。新実はそれを一瞥もせず無言で席に座った。残ったのは沈黙と、先程より十割二十割増になった死線、もとい視線。

「……………じい……………」

（な、なんでこんな変なやつがもう一人の男の生徒なんだよ…っ、ついてねえ…）

入学早々天国から地獄へとたたき落とされた一夏は机に突っ伏して、これからの学園生活が灰色にならないことを祈った…

千冬Side

新実と名乗る男。

本名を千方新実と言い、日本の某所で生まれ育ったという以外全く経歴が不明な、一夏に次ぐ二人目の男性IS操縦者。

年齢、生年月日、その他身体情報以外は一切不明。
幼少時どの学校で学び、どこで育ったかすら全く記録がないのである。

無論、普通の調べ方をして得た情報ではない。

あの天災、もとい束から得た情報だが、その天災を以てしても経歴は霞にも見えなかったという。

それもそのはず、隠されている、のではなく、存在しない。

はじめからデータなど存在しないから何処を当たろうと何も出てこないのは至極当然。

唯一、新実という男が情報に引っかけたのはISにあった一瞬の反応が束の元に伝わり、それを糸口に草の根をかき分けるようにしてやっと見つかったのが千方新実という男の戸籍情報だった。

「…新実、か。経歴はさて置いて、なぜ苗字を名乗らないのかも気になるが…」

更に不審なのは、日本政府から監視の要請が全く無かったことだ。出来るだけ厚遇するように、との通達以外特にこれといった要求もない。

それは一夏に対するものと真逆…日本以外の各国からも特にこれといった圧力は起きていない。企業に至ってはそもそもそんなもの知らないような対応だ。二人目の男性搭乗者の件は、確かに発表されたはずなのに。

新実に対する疑問は尽きないが…一番の疑問、それは彼自身の実力だった。

「……………」

無言で新実の刀が一瞬触れた首筋を撫でる。無論、シールドバリアと絶対防御に守られていたISなら死ぬことは無かった…はずだろうが、あの時一瞬突き抜けた首を走る感覚は忘れられない。

あれはスポーツで鍛える剣の道では見られる物ではない。

それを武として力として己が魂を打ち込み、相手を打ち倒すのではなく、ひたすら斬る事を前提とした実戦で戦う術としての剣。

自分のISに乗った時の力を、剣の実力のみでとっていいレベルで打ち負かしたあの男、一体何処であるの剣術を学んだのか。

…いや、どれだけ血の滲む努力をしてあれほどの実力を身につけ

たのか。

束の謀略とはいえ、自分を殺そうとした男を何の躊躇いもなく連れて来ることになるとは思っていなかった千冬だが、不思議と束に対する不満や理不尽さは湧き上がらなかった。

「千方新実…新実…。あの目が、どうも気になる」

それはブリュンヒルデとしての好奇心か、はたまた織斑千冬個人としての関心か。自信にも理解はできなかったが、新実の刀を持ったときの絶対的な自信を持ったあの目だけが千冬の中に引く掛かりを残していた。

通話記録 1

悪いな、^{タレン}重連。何分こつちも急だったから随分と無茶な頼みをし

てしまったが。

「いいアルいいアル！新実とボクの仲だロウ？これ位容易い容易い！それよりも、あの新実が表の機関に捕まった事が驚きアルね」

状況が状況でな…面倒くさいことこの上ないんだけど。

「まあなんとか情報に認識操作を行うことは間に合ったアルから…一応、道教会こうちでも働きかけてみるアルからも少し待つヨロシね」

ああ…手間かけるな。それと、親父の方だが…

「時間の問題アルねーそれは。こっちから情報は流してないアルが、それはもう時間の問題ネ。IS学園が日本にあるのが致命的だったアルね」

だろうな…いや、それはまあ分かってるよ。クッソ…また面倒なことになりそうだ。あの疫病神め…

「せつかく家出て陰陽寮の目から逃れられたのにネー…どんまいアル」

はあ…まあ3年も待てんからな。何とかするさ。で、情報阻害の方は道教会か？

「いや、フリーメーソンが引き継いだアル。ウチの組織じゃあ世界中、つてのはちょっと厳しいアルからネ」

そうか…まあボブには貸しがあるからそれで帳消しにしといてやるか。

「アツハハ、ボブも大変あるネー」

一番大変なのは俺だ。全く…

「まあ場所が一定してるとこつちも会いやすいアル。今度酒でも飲みに行くネ」

分かった。今度な。

キイイイイン

「おっと、霊通回線も限界アルね。全く、IS学園というのは表の天災が見張ってるせいで繋げにくいアル」

篠ノ之束、とか言う奴か？…どうでもいいが、まああいつ程じゃないだろ…面倒なのはどつちも同じだろうが。

「ま、精精気をつけるアル。新実は昔つから変なものには好かれやすいアルから」

…ほつとけ。マジで。

「アツハハ。じゃ切るアルねー」

……。

「ポーン 午後 2時 42分」

ガチャッ。

通話終了。
通話先 時報

* - 3 IS学園(後書き)

こんなSS書いてる俺はマジキチかもしれない。

* - 4 無視、軋轢、敵対（前書き）

好き勝手書くの楽しいイイイイイイイイイイイイ！！！！
自分勝手、傲慢って最高だよな！

現実じゃそうもいかないけど。

* - 4 無視、軋轢、敵対

授業が終わり休み時間になった僅かな合間だった。

その日、突然転校してきた謎の男、新実という男に釘付けになり、誰もがその一挙一動を見逃すまいと目を向けている。

「……………じい……………」

「……………ハア」

新実は一瞬とても鬱陶しそうに一部の視線へ睨み返したが、すぐに席についたままなにやら本を取り出し、読書に励み始めた。

無視を決め込んだようだ。

一定の速度でページを捲っていく一瞬一瞬を周りの女子生徒はじいっと見つめている。無論、教室の外のドアにも大量の女子が集まっている。

ちなみに一夏は居ない。篠ノ之箒に呼び出されて屋上へ行ったのだ。

よって、この教室で接触できる男子は新実しか居ない。その為皆困って新実を見ているのだが、誰も話しかけようとしなない。否、出

新実の机を両手で叩きつけながらセシリアが怒鳴りつける。

ここで怒るのは無理もない。人が話しかけているのに全く反応がないのだ。しかもセシリア視点では新実はこの教室で最底辺だ。故に、無視することなど許されるはずがない。

「……………」

新実は答えない。

一定の速度で捲られる本のページは一向にペースを変えることなく、まるで話しかけられた事実など存在しないかのように続いている。

「あ、貴方！一体誰が話しかけていると思っていらっしゃるんですの！？この一学年に終始主席のエリート中のエリート、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットが直々に話しかけているんですよ！！」

ピクリ、と新実の手が止まる。

それを見たセシリア・オルコットは頬を釣り上げた。やっと最底辺の人間が自らの犯した失態に気がついたと思っただのだ。…実際失態を犯したのはセシリア・オルコットの方だったが。

典型的なエリート様的な発言は新実の耳に確かに届いた。自画自賛、自らがこの中で最も偉いと信じて疑わないような発言、某地球連邦軍特殊部隊のエリート様でもこうまで酷い発言はしないだろう。

「ふ、ふん！やっと自分の立場に気づきましたの。私わざわざあ

あなたのような不良みたいな輩に話しかけているのですから、さつさと答えるべきですわよ。…まあエリートで貴族である私は寛容な心で貴方の失態を許して差し上げますわ」

よくもまあベラベラと、傲慢な発言が並べ立てられるものだ。クラスメイトの内も、若干セシリアに引いていた。

そして、その言葉を向けられた当の新実はやっと…セシリアの方へ顔を向けた。

何の表情もこもっていない顔、冷たく蔑んだ目。新実は要するに馬鹿を見ているのだ。このような人間は新実にとって何の価値もない。無価値だ。

セシリアは自分に向けられる異様な視線に、ゾツとした。今までエリートである自分にこんな眼を向ける人間は居なかった。故に恐怖したが、それを表に出すことをセシリアのエリート魂が邪魔をした。

「な、なんですそのその目は！ま、全く、日本の殿方というのは礼儀というものがありませんの！？！？だいたい貴方は」

「おい、お前」

初めて新実が口を開いた。

突然の発言に言葉をつまらせるセシリア。
一体何を言うのか、と教室中が注目する。

セシリア・オルコットが学年主席であり、唯一試験での戦闘で教

官に勝利したことは誰もが知っている。それを皆が知っているということをセシリア自身も知っている。

故に、次に続く言葉は謝罪か、あるいは機嫌を取る為の発言だとい誰も予想した。

勿論、違った。

「しづみ」

簡潔で、新実の心の内が一瞬で伝わる一言だった。教室が、凍りついた。

＊4 無視

セシリア・オルコットという女へ抱いた印象は、傲慢な女。それに尽きた。むしろ人はここまで傲慢に慣れるのか、と感心できたほどだ。

長居する気のない学園生活だったので、早々から無視を決め込んでいたのだがまさかここまで頭の悪いアプローチを掛けてくる馬鹿が居ると思ってもいなかった。

一応、このIS学園はエリート校だと聞いていたからだ。…まあ確かにこいつはエリート様のようなが。

耳障りなキーキー声は俺の機嫌を著しく害し、元々そんなに高くない忍耐をあっさりと削り去った。要するにブチつと来た。

目の前の女、セシリア・オルコットは顔を赤くしたり青くしたり

と忙しそうにしている。

「用がないなら失せろ。英国人」

国に恥を掻かせたくなかったらな、と新実。

もはやセシリア・オルコットという人間に何の興味もない新実は
そう吐き捨てる、目の前の本へと意識を戻した。

数瞬の間を置いてセシリアがヒステリックな叫びを上げるまでは。

「ななななな、なんて無礼な殿方ですのっ!!!それが女性に対し
てかける言葉ですよ!!!これだから品のない極東の黄色い猿は」

ヒュカツ!!

全て言い終わる前、空気を裂くような音と共にセシリアの眼球の
数ミリ手前に新実が鉄製の本の扉を向けていた。

「つう?!」

自らの眼球手前まで向けられた扉。それがなんだか一瞬で理解で
きなかつたセシリアは何が起こったか分からないという顔をしたま
ま、目を見開いて固まった。

「その汚い口仕舞って、国にでも帰ったらどうだ?」

侮蔑を込められた言葉。

次第に目の前から扉の尖った部分が離れてゆき、それと共に新実
の絶対零度の瞳がセシリアの目に映る。

新実のその神速とも言える速さの業を駆使した暴挙に、教室中がざわめいた。

新実はふっ、と鼻を鳴らすと、片手で持っていた本に頬を挟んでそのまま閉じ、

「IS学園はエリートが集まる学校って聞いてたが…」

机の中に仕舞った。

そして机の中から教科書類や筆記用具の類を取り出し、机に置くと、目だけをセシリアに向けて言った。

「とんだエリート様だな」

「な……ッ!!」

まさに意趣返しとも言える暴言。その言葉にセシリア・オルコックは絶句した。

「授業が始まるぞ？英国人」

言つが同時に鳴り響くチャイム。

「…ッ！あ、後でまた来ますわ！逃げない事ですわよっ!!」

「…ハア、馬鹿もここまで来ると感心できるみたいだな…」

「……ッ!!」

まだ何か言いたいようなセシリア・オルコットだったが、程なくして現れた織斑千冬の姿を確認して齒噛みしながら席へ戻っていた。

なんて鬱陶しい女だ。

新実の知る英国は紳士淑女の国と思っていたので、セシリア・オルコットの暴挙は新実の英国全体のイメージを下げる結果となった。

こうして新実とセシリアのファーストコンタクトは終了し、その結果はお互いに向けられたトリガーのゆるいリボルバーの撃鉄を引き上げたも同意の結果となった。

そして、そのボルテージのトリガーは、簡単な衝撃で引かれる事となる。

「なっつとくいきませんわ!!!!!!」

ダンッ!!と机を叩きつけてセシリア・オルコットが立ち上がった。椅子が衝撃で大きな音を立てるが、本人は意にも解さず続ける。

「百歩譲ってその…織斑一夏なる男性が代表になるというならば、クラス中の支持を集めてそうなたというなら認めますが…ッ! その、新実なる野蛮人が代表になるなど、絶ッッッ対に認めませんわ!!!!!!」

ダンッ!!

教室中が静まり返った。

事の発端は簡単な事。このIS学園で特有の制度　クラス代表という、IS先において主将のような役割をする人間を決定しようということになった。そこで立候補を促したが立つものは皆無。そこで推薦という形で選出しようとなったのだが、そこで名が上がったのが織斑一夏と新実だった。

次々と推薦が上がってゆき、数の方では新実のほうが多数で代表が決まろうとしていたのだが。

一人推薦をしなかった女生徒、セシリア・オルコットが反発したのだった。

無論それも当然のこと、先程の会話セシリアと新実は険悪な関係

を見事に築き上げていた。

そんな彼女、ただでさえ男という存在を快く思っていないセシリアが、その新実が代表になるなどという事態を黙ってみているはずがなかった。

「だいたい、このような野蛮人を代表にしてしまえば我がクラスの品位が疑われるというものですわ!!」

「ちょ、お前いくらなんでも言っていていいことと悪いことがあるだろう!!」

それを同じく代表に推薦されて起立していた一夏がセシリアのあまりの暴言に思わず反論する。

友達という関係ではないとはいえ 新実自身に拒否されてあまり親しい関係ではないとはいえ 同じ男がここまで言われることを黙っていられる一夏ではなかった。が。

「貴方は黙っていてくださいまし!! 私はその野蛮人に言っているのですわ!!」

「う…」

セシリアのあまりの剣幕に言葉をつまらせる一夏。

それほどまでの気迫をセシリアは出していたのだ。絶対に納得がいかない、こんな選択はおかしい、とセシリアは本気で思っていた。

「大体その格好といい訳の分からないサムライ気取りなカタナとい

い…こんないい加減な男に、代表など、務まるはずがありませんわ
！！」

静まり返る教室内。

セシリアの荒々しい息遣いのみが教室で響く。

新実は、何も言わない。

「…新実、何か言いたいことはないのか？」

しんと静まり返った教室の中、織斑千冬が追求を受ける新実に対して恐らくクラス中の思いであろう質問を投げかける。

「何か言って欲しいんですか？」

別段言うことはない、と一応千冬の教師という立場を考えて敬語で言う新実。その態度が更に鼻についたのか、セシリアの剣幕は更に強くなった。

「ッ~~~~~！！！」

ピリピリとした雰囲気は教室中を占める。この場に山田先生がいれば卒倒していたかも知れないが、幸いなことに彼女は居なかった。

教室中が固唾を呑む中、新実は涼しい顔をして直立不動の体制を築いている。

「そうだな…」

新実は口を開いた。

「俺は正直な人間だからな、やりたくない事はやらない。だから誰が何と言おうがやらんといったことは絶対やらん」

その態度は傲慢にして不遜、だがそれに見合うだけの自信も伺える。

「だから、先に言っておこう。クラス代表だという役職は興味がない。故にやる気はない。やりたければセシリア・オルコット、貴女がやればいい。俺には関係ないね」

響き渡る声。

蹴った。

「な……………ッ!？」

一瞬セシリアは頭の中でその言葉を理解しようとして反芻して固まった。蹴ったのだ。クラス中の推薦によって決まり変えたクラス代表を。

セシリアの怒りは臨界点を超え、フツフツの煮えたぎるマグマのごとく静かに、ゆっくりと熟成されていった。

「…決闘ですわ」

「…そこは英国人が。まあ手袋でも投げつけてくると思ったんだがな」

その言葉を更にバカにされたと思ったセシリアは一瞬恐ろしい剣

幕になるが直ぐに取り繕った。それを肯定と受け取ったからだ。

IS戦はセシリアにとって十八番。

代表候補生に選ばれた実力を持ってすれば、稼働時間が1時間にも満たない(であろうと予測する)新実が敵うわけがないと思っていたからだ。

故に、相手をこちらの土俵へ引きずり込んだ時点でセシリアの勝利は決定している、と言っても過言ではないだろう。

「…いいのか？新実」

「構いません」

織斑先生の言葉にあっさりと返した新実。

セシリアにしてみれば鴨が葱を背負って来たと思っただろう。自分と自分の国をバカにした新実を合法的に裁くことが出来る機会を得られたのだ。

セシリアは頬を釣り上げた。

「まあ、貴女はISに関しては初心者でしょうから、ハンデをあげなくもないですわよ？」

余裕を持って新実にそう言い放ち、すこし落ち着いたところで新実の顔を見る。

新実は、晒っていた。

おまけ

一夏「…アレ？俺は…？」

クラス代表は一夏に決まりました。

* - 4 無視、軋轢、敵対（後書き）

ヤバイ、セシリアがめっちゃくちや悪役っていうか、噛ませになってるではないか…

せっしーはめっちゃいい子だよ？

ただファーストコンタクトが最悪だったのと、ぶち切れてあんななっただけで、

ほんとはいい子だからそれを忘れないでね。

残党さんの約束だよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659t/>

IS -Dark-

2011年8月19日23時42分発行